

琉球大学学術リポジトリ

胡瓜栽培のコツ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 滋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19576

三、植え付け地の地ごしらえ

地ごしらえの程度は竹林経営に当つてどの程度経営をかけるかどの程度木材生産量を期待するかをよく吟味し地形や地力や樹木の有無等に応じて次に述べる農業地ごしらえ法、林業的地ごしらえ法又は両法の作業を適宜に組合せる等すればよい。農業的地ごしらえ法は全面積に互つて樹木類や草本類を刈払つ



て掘り起し、やせ地では堆肥を一反歩当り二〇〇—一〇〇〇貫埋め込む。

傾斜地では地表に草やワラを一面にしきつめて表土の流出や乾燥を防ぐ、森林地では周囲の樹を残して防風樹帯をつくるし樹のない所では前もつて防風樹帯を植え付けておく、開こんだ一、二年間豆科の作物を間作して地力を増し取入を計ることも出来る。

林業的地ごしらえは森林地で労力を節約して自然力をうまく利用する地ごしらえ法で樹を適宜伐り残して風当りや日射をやわらげる様にし、その間に竹を植え付けるようにする。地ごしらえに当つては肥料木や枝張りとう生育の正常な健全木で高さ八米以内のものを点々と又は同高線上に列状に一反歩当り二、三本伐り残して枝張りを適宜せん定し老衰木や病害木や枝張りの強い樹等は除伐りき下草や灌木類も刈払う。勿論周囲に防風樹帯を伐り残す。掘り起しは植穴を苗株より少し大き目にし以て毎年周囲を二—三戸宛掘り抜けてゆく。(大山 保表)

胡瓜の栽培のコツ

胡瓜は果菜類中最も栽培期間の短かいもので、三、四カ月で栽培が終る。が胡瓜は草勢があまり強くないので植え放しでは殆んど収穫は望めない。多収を計るには入念な栽培管理が必要であり、栽培期間が短いにもかかわらず、比較的多くの労力を要するものである。

一、栽培管理

果菜類の収量は「収穫果数×一果平均重量」で現わされるが胡瓜の場合収穫される胡瓜の大きさは、短期、品種消費者によつて一定の好みがあり必ずしも成熟期に収穫されるものではなく、好みによつて未熟のうちにも一定の大きさで収穫されるので収量は果数に左右されることになる。従つて胡瓜の多収には収穫果数を増さねばならぬ。しかば果数の増加はどうすれば良いかと言うことになるが、先づ考えられることは、節数の増加と着果率を高めることである。然し長期間にわたつて節数を増すのではなく、胡瓜は短期作物であるので多肥主義でどんどん蔓を伸ばし着果節位を増し、早く沢山の果実を取めるようにする。

節数は主枝にかぎらず側枝の節位も大切な問題であり整枝が必要となる。整枝の方法は品種や地方の習慣によつて異なつてゐるが、節成種で側枝が殆んど出ないものは整枝は問題にならず、支柱に誘引するのみである。節成り性のものでも側枝の発生が多いものとか或は育苗が良く肥料が充分であり定植後の生育が順調にゆけば子蔓が発生しこれからの収穫も大きなものである。しかしこの場合は一本の側枝に一、二果位では期待し難いので二三葉で摘芯する。七、八枚も出てから一、三枚で摘除したのでは無駄が多くなるので、摘芯は出来得るだけ早い方がよい。

側枝は収穫が終れば切り捨て、通風を良くし病虫害の発生を防ぐと共に薬剤散布等の作業を便利にする。大型胡瓜では収穫の主体が側枝にあるので、主枝を三、四尺で摘芯し、多くの側枝を発生させるか、主枝を五、七枚目で摘芯し四、五本の側枝を出させるとよい。

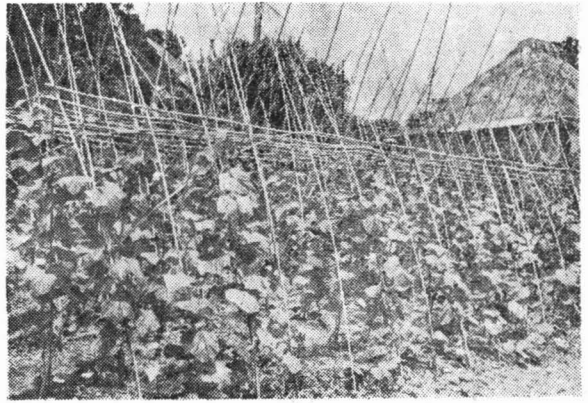
胡瓜の蔓の伸びは芽が上に向つて居る時がよいので、支柱を立てると伸びも良く狭い株間でも充分に収穫出来る。

施肥、薬剤散布、収穫等の作業にも便利で、且つ果実の外観も良い。地上に這はすとべト病の発生が多く、果実は奇型果が多く片側が白色を呈するので商品価値を低下する。

支柱立ては、一睡の支柱を組み合せて屋根型に作る。竹や細い木を用いるが、竹が取扱いに便利である。先ず材料を株元より三寸位外へ出して出来るだけ深く挿し込んで、立て支柱の先端を組み合せる。

蔓は巻ひけを出してからみついて伸びるが、胡瓜は蔓の伸びが早く、発育盛には一、夜で四五寸も伸びることがあり、巻ひけのみでは支柱からみ合うことが出来ないため蔓の結びつけが必要になる。結びつけは朝鮮カマスとき、その糸で蔓を廻し一度ねちつて支柱に結びつけるとよい。側枝の発生するものでは横に蔓を張りこれに結びつかす。

前にも述べたように這い作りは種々の作業に不便を感じるが農家では殆んど這い作りが習慣になつて居るようである。這い



胡瓜の支柱作り
(宮里・新垣氏の圃場)

か、肥料の分解を早めるために行われるのであるが、根が畑全面に伸びた頃行い、根を切断したのでは効果はなく、かえって害になる。中耕を行うには根が伸びる前にやるのが大切である。胡瓜は短期作物であり何回も行う必要はなく、支柱立の途中中耕して敷草を行えばよい。

二、肥料

前にも述べたように胡瓜は短期作物であり収量は発育の程度に左右される。即ち着花節位を増し葉面積を多くして果実の負担力を大きくすることである。そのためには多肥栽培をせねばならない。充分に肥料を施すと、品種特有の形を現わし、品質もよくなる。又開花後早く収穫出来るようになる。肥料不足の時は株の負担能力が大きくなるので、果実の着生は悪く、果実の発育も遅れ、着いたのも曲りくねつて、商品価値が下る。又若い胡瓜が、極端に肥料不足すると花等が多く着生し心止りとなり、イチけたりで終つてしまう。

すべての植物でCIN率が低いと栄養成長が盛んになりCIN率が高くなると生殖、成長即ち開花結実の作用が盛んになるが、胡瓜は早いと六に栄養成長も生殖成長も急速に行うので、窒素肥料を最も多く施す必要がある。窒素肥料を多量に施すと葉は軟弱になり病虫害の発生が多くなるので、組織を強める為に、窒素の多用に伴つて加里も多量に施用するがよい。併し初期に加里を多量に施すと発育を抑制するので分蘗する。堆肥を施用すると土じょうの物理的性質をよくし粘質土は軽しようとなり、酸素の供給がよく排水も良好にする。砂質土では水分、養分の保ちをよくするので、胡瓜栽培では堆肥はかくべからざるものである。

施肥の例を示すと、反当り堆肥六〇〇貫、硫酸二〇貫、(一五)過石二十五貫(六)、塩加八貫(四)。○内は追肥

三、收穫

前にも述べたように収穫時の胡瓜の大きさは、時期、地方によ

り一定の好みがあり、必ずしも成熟期に収穫されるものではなく、未熟なものを収穫する。未熟な時に収穫すれば植物体の負担が軽くなるので、次々と果実を形成し、収穫果数を多くする特に若いうちには負担能力が小さいので、一三番成りは四、五寸位で、若取りし、株の負担を軽くすることによつて後の収穫をよくする。

成熟期に収穫すると株の負担が大きく、雌花の発育が悪く落花が多くなる。又例へ成熟期収穫で増収したにしても単個が安いので収入は少くないことになる。

果実の発育は速く、開花後三、四日間は一夜で一種、一週間も経つと一夜で三種も伸びの毎日畑をみまわつて収穫せねばならない。収穫の時刻は早朝がよい、果実は夜の内に太るので目方も大きくなる。しかも果実の生気がよく、外觀がよいし、品質が少くない。日中採れば萎れ方が早いので、色沢が悪く、生気を無く、切取は果梗を五分位残して切取り、取扱はいいに行う。

四、病害

胡瓜栽培を行う時には、必ず病害が発生することを考へねばならない。最も普通に発生するものにべト病、ウドンコ病、炭そ病等がある。いづれも雨が続くると発生が多くなるので、これから注意せねばならない。

べト病は最も被害が大きい。病徴は葉面に黄色の小斑を生じ密次綿に大きくなり、淡褐色の葉脈にかこまれた多角形の病斑となる。これの防除は、雨滴が下葉の裏に飛散せぬように充分敷草をする。整枝、誘引を充分に行つて、日光、空気の流れをよくする。施肥を充分に行い肥料切れせぬようにする。又六斗式少量石灰ホルドウ液、水銀ホルドワ、ダイセーン等を一週間から十日置きに撒布する。雨期は特に注意し、撒布間隔を短かくし、晴間を利用して撒布するがよい。

ウドンコ病は胡瓜の葉面に白い粉をまいたようにあるが、ついに葉が枯れてしまう。これは、石灰硫酸合剤の〇、一から〇

作りが行われるのは風の被害を軽減することにもなるが、栽培が粗放であるためとも考えられる。這い作りの場合は、大型の胡瓜では親蔓が数節伸びたところで摘心し子蔓を四五本伸ばし四方へ這わす。更に子蔓を摘心して孫蔓を出させるとよい。

小型の品種は畦の一端に植えて親蔓が次の畦に達した時に摘心し、多くの子蔓を伸ばせしめこれに実らすようにする。

胡瓜は浅根性で直根のみが深く入り、殆んどが表土に分布して居り、敷草をした胡瓜畑を敷草をかきわけてみると白い根が一面をはつて居る。かように胡瓜の根は表面に分布するため、土じょうの乾燥に弱いので、常に土じょうの表面を濡らしておることが肝要である。そのため灌水の容易な場所にて栽培し、敷草を行つて常に濡り空を保たしめるがよい。又敷草は雨のために葉裏に土がたまりきつければ雨のたまり病が発生し易いが、べト病を防ぐためにも是非必要である。

中耕は固まつた土を軟け、通気をよくし、根の伸長を計ると

二つ位にして一週間に一回位 布する。併しボルドウ液が葉に残つて居ると葉害を主とするから、ボルドウを撒布して居る胡瓜は硫酸剤を混合して四斗式石灰少量ボルドウ液を撒布する。

五、おわりに

胡瓜の栽培は最も労力を要するもので、労力の不足するところでは他の作物を栽培するがよからう。農家の胡瓜栽培は一般に粗放で収量も少くない様である。特に北這い作りが習慣化して居て節成り性の品種までも北這い作りにして居る。節成り性のものは短日で節成り性を現す為、台風期前に栽培されるべき品種である。従つて台風の被害を受けるおそれがないので節成りのみでも支柱作りをしたいものである。支柱作りをした場合は、反当腐付け本数が多くなるので、収量は北這い作りよりよい。

胡瓜は多肥主義で栽培されるため植物体が軟弱で、病虫害は必ず発生するものである故薬剤撒布の回数を多くしなければならぬ。若し、多量の肥料を施すことが出来ず又薬剤撒布の不可能な時は、栽培面積を縮少し、肥料、労力を注ぎこんで集約栽培をすべきである。

(管 城 滋)

うり類の害虫とその防除

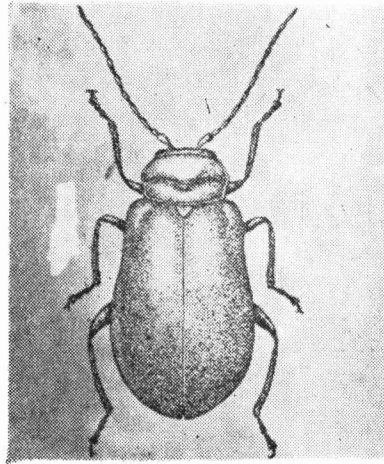
一、ウリハムシ

琉球におけるウリ類の害虫としては、先づ第一にウリハムシをあげねばならない。これは全球は勿論日本本土、朝鮮、支那等の比較的温暖な地方に多く、被害もまた著しい。

この害虫は俗にウリバエ(瓜守)あるいはアカバエとも呼ばれて居る。実物を御存じでない方はハエの部類かと思われるかも知れませんが、ハエとはおおよそ縁遠い種類である。止つて居る時はハエのように両方の脚をもんだり、体を掃除したりする動作が見られるが、口は葉をかんで食べるようにできている。

一、どんな形をしているか

成虫(親虫)は体長約七粒(二・三分)で、略長だ円形をしたとう黄色の甲虫である。幼虫(子虫)は細長く略ワジ形をして黄白色を呈する。卵からかえつた当初は約四粒(一・三分)位であるが、成長したものは約一〇粒(三・三分)位に達する。



ウリハムシ(湯浅原図)

二、どのような生活をしているか

成虫は三月頃潜伏所を出て、ウリ類に縁の近い野生植物について居るが、四月頃になつてウリ畑に飛来する。成虫はウリ類の葉や果実の表皮を食う他ナス、トマト、大麦、小麦、稲、インゲン、小豆、大豆、大根、白菜、ゴボウ、ヒマワリ等を食害する。然しながら一般にウリ類程被害は著しくない。成虫は性敏感で、物に驚くと急に逃げ去るか、又は落下する。暗期は地表あるいは地中に行われる。卵からかえつた幼虫は地中で根を食う他地面に接した果実も食害する。苗の時代に発生が多いと生育を著しく害し枯死するようになる。

空一三回発生を繰返し、一二月頃漸く寒さが訪れると落葉草根、石垣等に潜り込み、冬をこして三月頃再び出現する。

三、どんなにして防除するか

人が接近したり、薬剤を撒布したりすると他へ逃げ去り、数日絶食して再びウリ畑に飛んで来るので、防除が思うようにならない場合があるが次の方法は効果的である。

- ① 苗の時代に発生している時は補殺する。予め糸網又はペラフィン紙などでカサ形に被うておくこと防除の効果が上がる。
- ② 発生が著しく捕殺で間に合わない時はひ酸鉛又は酸石灰一ポンドを水四斗にとかして撒布すると良い。然しひ酸鉛の場合は単用では割合に効果が少ないので、ひ酸鉛四〇匁にカゼイン石灰四〇匁を水一斗にとかして用いると良い。
- ③ 又ひ酸鉛四〇匁を三斗式石灰ボルドー液(この場合石灰は半量程度が良い)一斗にとかして用いると病害も同時に防除することができる。
- ④ 幼虫にはデリス剤が効果的である。これはカンコウ殺虫剤六匁を水一斗にとかし、一株当り八合位根元の地中に注入する。デリス粉一〇匁石けん二〇匁を水一斗にとかして撒布すると同時にアブラムシの駆除もできる。
- ⑤ 一般に用いられているDDT、BHCはウリハムシを殺す効果はあるが、ウリ類のものが害を被つて枯死する。又アブラムシ防除にもBHC、テップ剤は効果があるが前記のようにウリ類そのものが葉害を受ける。
- ⑥ HBCは前記のように葉、果実などにかけると葉害をうけるが、BHC一〇%粉剤を坪当り一〇匁、株元から三十五寸離して土表面に撒布し、表土を軽く混ぜておくこと暗期防止に役立つらしい。但し幼植物では葉害をうけるおそれがあり、成長したウリでも葉葉にふれないようにしなければならぬ。

二、その他の害虫

ウリハムシの他に琉球におけるウリ類の害虫としてはクロウリハムシ(ウリハムシに似た物で体は黒色をしている。防除